



好き好き大好きお姉ちゃん♥

ベタ甘☆カフェ同棲

青橋由高

illustration ◎七瀬 葵

美少女文庫
FRANCE SHO·IN



お姉ちゃんは超プロッソン！

(むふふう……るーくん、やつぱり寝顔、可愛い……っ)

数ヵ月ぶりの弟の懐かしい匂いを嗅ぎながら、姉は躊躇することなくベッドに潜りこんでいく。

(むはっ！ るーくんの匂い……やあん、お姉ちゃん、むらむらしちゃうよお)

普段はコーヒーの香りを嗅ぎ分ける研ぎ澄まされた鼻が、今は愛する弟の体臭を思いきり堪能している。

(シャワー浴びちやつたから、匂い、ちょっと薄い……。お姉ちゃん、ちょっとがつかり。でも、シャンプーは昔と一緒の使つてるんだ。んふふ、くんくんしちゃうぞお？) もぞもぞと布団のなかを進み、寝ている弟のすぐ横まで侵入する。実家から持ってきた抱き枕にいつものようにしがみつきながら、気持ちよさそうに寝息を立てている。

(今日もぐっすりだね、るーくん)

この七つ年下の可愛い弟は、一度寝つくとなかなか目を覚まさないのだ。つまり、姉にとつては大チャンスである。

(ぶりちーさはそのままだけど、愛らしさのなかにもそこはかとなく男の子らしさも漂うという、まさに極上のごちそうだよお……あん、お姉ちゃん、るーくん見てるだけで濡れちゃう)

子供の頃から見守ってきた姉にとつて、弟の成長はこのうえない喜びだった。

(おはようからおやすみまで、ゆりかごから墓場まで、お姉ちゃんはるーくんを見守りつづけるからねっ)

弟の顔は確かに大好きだが、それだけの理由でべた惚れしているわけではない。その存在すべてに惚れているのだ。だから、外見だけで弟に寄ってくるような輩は許せない。排除すべき敵である。

(だからね、るーくんに悪い虫がつかないように、お姉ちゃん、今日も秘密の家庭教師してあげるね?)

姉とは反対側を向いて寝ている弟の耳もとに唇を寄せ、小声で囁く。

「お姉ちゃん大好き。ボク、お姉ちゃんのことが大好き。お姉ちゃんを好きになる。世界で一番お姉ちゃんが好き。ボク、お姉ちゃんと結婚する……」

何年もずっとつづけている地道な睡眠学習だった。

実際に効果があるかはわからないが、可能性があるならやってみる。姉は、そういう性格だった。

「お姉ちゃんを好きになる、お姉ちゃん以外の女なんてただのカボチャだ、お姉ちゃんしか見えない……むつ」

囁きはじめて十分後、寝返りを打った弟がこちら側に顔を向けた。

幸せそうな寝顔のまま、しつかりと抱き枕を両手両脚で抱えている。

この抱き枕はかつて、姉が「これ、お姉ちゃんと思って使って！」とプレゼントしたものだ。

だが、実際に自分以外のモノが弟に抱かれているのを見ると、少々、否、かなり気分が悪い。たとえそれが自分の贈ったモノであろうとも嫉妬してしまう。姉は、そういう人間だった。

しかし、無理矢理枕を引き剥がせば、さすがの弟も目を覚ますだろう。

(ううう、悔しい……るーくんが望めば、いつでも抱き枕になつてあげるのにい) 抱き枕にヤキモチを焼きつつ、姉は弟のベッドのなかでじたばたと身悶える。

半年ぶりに弟との生活が再開した夜は、こんなふうにして更けていくのだった。

斗和子のコーヒーメモ その1

明日はいよいよ『プティ・フレール』オープン！

夢にまで見た自分のお店が開けることも嬉しいし、しかもるーくんと同棲生活もスタート！ 幸せすぎて怖いくらい。

でも、準備で身体はくたくたなのに、神経高ぶつてなかなか眠れない。

こーゆーときは無理に寝ようとしないで、いい香りのコーヒー飲んでリラックスするのがいい。うん、そうしよう。

カフェインのせいで目が覚めちゃうかも知れないけど、ビーセ眠くならないんだから、大好きなコーヒー飲んだほうがあ得だよね？ うん、そうだ。そうに決まってる。

まだ全然片づいてないお店のカウンターで私が取りだしたのは、あの独特の香りを強くするためにやや深めに焙煎したグアテマラ。

うふふ、いい香りっ。

そうだ。明日るーくんが来たらこの美味しいグアテマラを飲ませてあげようっと！





開店～お姉ちゃんと同棲しよ？

1 フルティ・フレール

「ここか……」

残暑厳しい初秋の土曜日、相原暁は額の汗をハンカチで拭いながら一軒の小さな喫茶店の前で足をとめた。

小柄な体にはちょっと大きすぎる印象のスポーツバッグを肩から上げた少年は、店のドアに貼られた手書きのポスターに目を留める。

「なにやつてるのさ、お姉ちゃん……」

整った顔が曇るが、そんな表情ですら魅力的に思えるほど暁は整った容姿をしていた。少年というよりも、少女といったほうがいいほどだ。

暁の目の前のポスターには今週日曜日、つまり明日、この喫茶店がオープンすると

書いてあつた。お世辞にもあまり上手とはいえない文字は、間違いなく暁の義姉である斗和子の筆跡だ。

しかし、暁がため息をついた理由はその文字のせいではない。書かれている内容でもなく、ポスターの一番下に記された店名のせいだ。

『ブティ・フレール』

フランス語で「弟」という意味である。

(まさか本当にこんな店名にするなんて……)

長年の夢だった喫茶店を持てると嬉しそうに姉が教えてくれたのは一年ほど前。ちょうど暁が高校の受験勉強真っ最中の頃だ。

「るーくんが喜んでくれるような名前にするね！」

そのとき斗和子はそう言つていたことを思いだす。

(どっちかというと、僕よりお姉ちゃんのほうが喜んでるような……)

ずり落ちたバッグを肩にかけ直し、店の裏側にまわる。

暁と斗和子は姉弟だが、血は繋がっていない。暁の父と斗和子の母の再婚によつて姉弟となつたのは今から十年前。暁が六歳、斗和子が十三歳の頃だ。

年が離れていたこともあつたし、父子家庭で母を知らずに育つた暁はすぐに姉に懐いた。だが、それ以上に斗和子は暁を溺愛した。両親が「私たちじやなく、斗和子の

ための再婚みたいね」と苦笑するほどに斗和子は暁にべつたりだったのだ。

それは暁が成長しても、斗和子が成人しても変わることはなかつた。それどころか ブラコンは加速度的に進行中である。

(お姉ちゃん、留守なのかな?)

裏口から入れと言われていたのだが、呼び鈴を何度か鳴らしても反応がない。

(携帯くらい持つてくれないかな、いい加減)

昔から壊滅的なほどに機械類が苦手な姉は、いまだに携帯電話すら持つてない。もちろんパソコンなど論外だし、FAXすらまともに送受信できない二十三歳だ。

そんな娘が一人で喫茶店を開くと聞いた両親が、姉の世話係として弟を送りこもうと決心するのにそう時間は要しなかつた。パソコンどころかFAXも使えないで商売をしようなどというのは無謀すぎると判断したからだ。

「お前はあの子と違つて機械に強いし、家事もできる。悪いが、斗和子を助けてやつてくれ」

義娘を猫可愛がりしている父親からそんなふうに頼まれば、人のいい暁が断れるはずもない。暁が斗和子と同居することは家族会議であつさりと可決された。

それが、飢えた肉食獣の檻のなかに美味しそうな獲物を放つと同義だと両親が知つていたかどうかは不明だが。

「お姉ちゃん、いないの？……あれ？」

ダメ元でノブをまわしてみたら、ドアは開いていた。

斗和子は機械関係はまったくダメだが、それ以外の点は（弟に関することを除けば）びっくりするくらいにしつかりしている。出かける際に施錠をし忘れるなんて可能性はかなり低い。つまり、斗和子はこのなかにいるということだ。

「お姉ちゃん。僕だよ、暁だ、よ……おおおつ!?」

薄暗い店内を慎重に進んでいた暁の耳が、急速に接近する足音をキャッチした。同時に、聞き慣れた声も耳孔に飛びこんでくる。

「るーくううううーんんつつつ!!」

「お姉ちゃん……危ないってば!?」

真新しい床にはいくつか段ボール箱が積まれていた。そもそも、大人が全速力で走れるような広い店ではないのだ。

薄暗く、狭く、そして障害物が散見する地帯を一直線に思いきり全力で駆ければどうなるのか、子供にでもわかる。

「あうつ!?」

そして、その誰にでもわかる結末が暁の目の前で当然のように展開される。

「お姉ちゃんっ」

斗和子は、それはもう見事に段ボール箱に蹴つまづき、文字通り宙を舞つて弟の胸に飛びこんできた。正確には、新品の床に鼻血の花を咲かせるより先に駆け寄つた暁がどうにか姉を受けとめたのだが。

「わわ……わわっ!?」

斗和子はやや長身で、ふつくらした身体つきをしている。

一方の暁は平均より背が低く、まるで少女のように細身だ。
しかも斗和子には運動エネルギーが加わっているため、これまた誰もが予想し得る結果が待つていた。つまり、

「痛たた……っ」

斗和子に押し倒されるような格好で尻餅をついたのだ。

「るーくん、大丈夫……?」

「う、うん。ちょっとお尻が痛いだけで……。あ、お姉ちゃんは平気？ 怪我してない？」

「るーくんが守つてくれたから、お姉ちゃんは全然」

「よかったです。……もう、いきなり飛んできたからびっくりしたよ？」

「ごめんね。るーくんのお部屋で掃除機かけてたから、呼び鈴が聞こえなかつたの」

「そうなんだ。……ところでお姉ちゃん、そろそろどいてくれない？」

二人とも無事であるとわかつた途端、暁は急に気恥ずかしさを覚えた。姉の吐息が感じられるほどに顔が接近していたし、

「なんで？」

「なんでって……」

姉の柔らかい身体がもにゅもにゅと暁に密着していたのだ。

（お、お姉ちゃん、またおっぱい大きくなつてる……？ それに……シャンプレーも変えたのかな？ いい匂いがする……）

半年ぶりに感じる義姉の体温と匂いに、高校一年生の少年は変な気分になつてしまふ。

そんな義弟の思いを知つてか知らずか、斗和子はなかなかどころとしない。

「久しぶりなんだよ？ これくらいいいじゃない」

それどころか両手を暁の首にまわし、さらに密着してくる。シャツの薄い生地越しに胸の弾力を感じて、暁が耳を赤くする。薄暗い店内だからばれてはないだろうが。

「久しぶりって、しょっちゅう会つてるじゃない!?」

「るーくんとハグするの、久しぶりだもん。すりすりするのも久しぶりだもん」

「あううつ!?」

抱きしめるだけでなく、頬ずりまでしてくる。

